

復讐が終わってみると、それが正しかったのかわからなくなつた。  
あの時の私には怒りしかなかつたから、正常な判断はつかなかつた。

私は決して、彼らを殺したことが間違つたなんて思つてない。  
他の誰が何と言おうと、私は彼らに死んでほしかつた。

ただ、”その役目を人に押し付けてしまつた”  
多分、私はそこが引っかかっている。

やるなら、自分の手を汚すべきだったんだ。

だからここへ相談に来るもの達が自分のように、  
神の加護を受けて尚迷わずにするよう、しっかりと相談者を見極めたい。

この教団の在り様が善いことなのかどうか私にはわからない。

わからないが、それでも私は、本来ならば手前で背負うべきだった業をお優しい教祖様に背負わせてしまった。  
その罪は、償いたいのだ。

これ以上、不必要的までに彼が余計な業を背負うことがないように。